

黄金餅

三遊亭円朝

青空文庫

ずツと昔時芝の金杉橋の際へ黄金餅と云ふ餅屋が出来まして、一時大層流行
 たものださうでござります。何ういふ訳で黄金餅と名けたかと申すに、芝將監殿橋
 の際に極貧の者ばかりが住で居る裏家がござりまして金山寺屋の金兵衛と申す者の隣家
 に居るのが托鉢に出る坊さんで源八と申す者、近頃何う致したのか煩つて寝て居る
 から見舞てやらうと金兵衛が出て参り、金「御免なさいよ。源「ア、御入来なさい。見る
 と煎餅のやうな薄つぺらの蒲団で爪で引搔くとポロ／＼垢が落る冷たさうな蒲団の上に
 転がつて居るが、独身者だから薬一服煎じて飲む事も出来ない始末、金「私はね今日は
 アノ通り朝から降りましたので一日薬を仕ようと申つて休んだが、何うも困つたもんです
 ね、何ですうい病氣は。源「ハツ／＼いえもう貴方、年が年ですから死病なんでせう。金
 「お前さん其様な氣の弱い事を云つちやアいけません、石へ獅噛附ても癒らうと云ふ了
 簡で居なくツちやアいけません。源「いえ私はそら六十四ですもの。金「ナニ八十に
 なつても九十になつても生きて居ます、死にたいからつて死なれるものぢや
 ないから確かりして居なくツちやア。源「有難う存じます、毎度御親切にお見舞下さ
 つて。金「お前さん医者に掛つたら何うです。源「いえ掛りませぬ。金「其様な事を云は

ないでさ、此奥このおくの幸齋かうさい先生せんせいは大層たいそう上手じやうずだてえから呼んで来て上げませうか。源「いえいけませぬ、いけませぬ、ハツ／＼医者いしやに掛かるのも宜ようがすが、直すくと薬やく礼れいを取とるのが残念ぜんねんですから。金「医者いしやに掛かれば是非ぜひ薬やく礼れいを取とられませう併しかし夫それが厭いやなら買かひぐ薬すりでもしなすつたら。源「買かひぐ薬すりだつて薬すり違ちがひでもすると大おほ事ごとになりませうからまア止よませう、夫それより私わつしは喫たべて見みたいと思おもふ物ものがありますかね。金「何なんです、遠慮えんりよなく然さうお云いひなさい、私わつしが買かひぐつて来きて上げませう、何どん様な物ものが喫たべたいんです、何どうも何なんだつて沢山たんとは喫たべられやしますまい。源「アノ私わつしは大福餅だいふくもちか今いま坂さかのやうなものを喫たべて見みたいのです。金「餅もち氣けのものを沢山たんとくつ喰くちやア悪あくくはありませぬか。源「いえ悪あくくつても構かまひませぬ。金「ぢやア買かひぐつて来きませう、二ふたつか三みつつあれば宜いいんでせう。源「いえ、何卒どうぞ三十さんじゅうばかり。金「其その様なに喰くへやアしませぬよ。源「十二じふに喰くへますから、願ねがひたいもので。金「ぢやア買かひぐつて来きませう。直すくに出でかけたが間まもなく竹たけの皮かわ包はづを二ふた一いつ包はづ持もつて帰かへつて参まゐり、金「サ買かひぐつて来きたよ。源「ア、有あり難がたう。金「サ、お湯ゆを汲くんで上げるか。らお喫たべ、夫それだけはお見舞みまひかた／＼私わつしが御馳走ごちそうして上げるから。源「ハツ／＼何どうも御ご親切しんせつに有あり難がたう存ぞんじます、何卒どうか貴方あなたお宅たくへ歸かへつて下くださいまし。金「歸かへらんでも宜いいからお喫たべな、私わつしの見て居ある前まえで。源「夫それがいけないので、私わつしは子こ供どもの時分じぶんから、人ひとの見て居あ

る前まへでは物は喰くはれない性しやうぶん分ぶんですから、何卒どうぞかへ帰かへつて下さい、お願ねがひでございますから。
 金「あい、ぢやア帰かへるよ、用もちがあつたらお呼よびよ、直すくに来くるから。と金兵衛きんべゑは宅たくへ歸かへつた
 が考かんがへた。金「はてな、彼あの坊主ぼうずは妙めうな事を云いふて、人ひとの見て居ゐる前まへでは物が喰くはれない
 なんて、全ぜん体たいアノ坊主ぼうずは大たい変へんに吝けちで金かねを溜ためる奴やつだと云いふ事を聞きいて居ゐるが、ア、云いふ
 やつきつともの奴やつは屹きつ度ど物を喰くはうとするとボーと火かか何なにか燃もえ上あるに違ちがえねえ、一ばん見けんたいもんだな、
 食物くひものから火ひの燃もえる処ところを、ウム、幸さいひ壁かべが少すくし破やぶれてる、斯かうやつて火箸ひばしで突つついで、
 ブツ、ヤー這はひだ出して竹たけの皮かわを広ひろげやアがつた、アレ丈だけ悉みん皆なく喰くつちまうのか知ら。見て居ゐる
 とも知らず源げん八ぱちは餅もちを取とり上げ二にツに割わつて中なかの餡あんを繰くりだし、餡あんは餡餅あんもちは餅もちと両りやう方ほうへ積つ
 上げまして、突とつ然ぜん懐ふところ中ちゆうへ手てを突つ込み暫しばらくムグぐやつて居ゐたが、ズルぐツと扱こ出し
 たは御納戸おなんどだか紫むらさきだか色いろ気けも分わからぬ様やうになつた古ふるい胴どう巻まきやうな物ものを取とり出しクツくと扱こ
 くと中なかから反古紙ほんこがみに包つつかた塊かたまりが出でました。之これを執とつてウームと力ちから任まかせに破やぶるとザラぐ
 ぐと出でたのが古金こきんで彼かれ此こ五ご六ろく両りやうもあらうかと思おもはれる程ほど、金「お、金子かねだ、大層たいそう
 持もつて居ゐるやアがるナ、もう死ぬと云いふので己おれが見舞みめえに行いつてやつたから、金兵衛きんべゑさんには是これ
 だけ残あと余とはお長家ながやしゆうの衆しゆうへツて、施ほどこ与しでもするののか知しら、今いま茲こゝで己おれが行いくと尚なほ沢山たんともら貫へる
 訳わけだが。と見て居ゐると金かねを七なな八やつづ、大福餅だいふくもちの中なかへ入いれ上うへから餡あんを詰つめ餅もちで蓋ふたをいた

してギユツと握にぎり固かためては口くちへ頬張ほくばり目を白しろツ黒くろにして吞のみ込んで居ゐる。金「ア、彼あれを喰くひやアがる、何どうも酷ひどい奴やつだナあれく。と見て居ゐる中うちに忽たちまち五六十兩りやうの金子かねを鵜うの呑のみにしたから堪たまらない、悶もがき搔まはつて苦くるしみ出し。源「ウーンウーン金兵衛きんべゑさん、金兵衛きんべゑさん。金「あいく今いま行くよ、今いま行くよ。源「ウーンく。金「何どうしたい。源「ハツく。金「おくお湯なも何なにも翻こぼれて大たい変へんだ。源「ド何どう卒ぞお湯なをもう一杯いちぱい下さい。金「サお喫あり源「へい有あり難がたう。微ぬる温まゆ湯ただから其そのま儘まゴツクリ飲のむと、空からツ腹はらへ五六十兩りやうの金子かねと餅もちが這はい入いつたのでげすからゴロくと込こみ上あげて来きた。源「ムツ、ムツ。金「オ、吐はくのか吐はくなら少すこしお待まちち、サ此この飯おはち櫃ふたの中なかへ悉すつかり皆は吐はいてお了しまひ。源「ハツくド何どううぞモウ一杯いちぱいお湯なを。金「サお上あり。源「へい有あり難がたう。グート息いきをも継つかず飲のむと、ゴロくと喉のどへ詰つまつたからウーム、バターリと仰あふむけ向むけに顛ひつくりかへ倒たつて了しまふ。金「ア、おい源げん八ぼちさん、源げん八ぼちさん、ア、死しんだ、何どうも此この金かねがあるんで今いま迄まで死し切れず居ゐたんだナ、金かねを腹はらん中なかい入いれちまつてモウ誰たれにも取とられる気き遣つかがないから安やす心しんして死しんだのどが何どうも強がう慾よくな奴やつもあつたもんだな、是これが所いは謂ゆる有う財ざい餓が鬼きてえんだらう、何なにしろ此この儘ま葬ほうむつて了しまふのは惜をしいや、腹はらん中なかに五六十兩りやうの金子かねが這はい入いつてる、加おまけ之こに古きん金だ、何どうして呉くれよう、知しつてるのは己おればかりだが、ウム、宜いい事ことがある。直すくに宅たくへ帰かへつて羽は織おりを

ひき引かけ差配人の宅へやつて来ました。金「エ、今日は。おやは能うお出なすつた、
 金兵衛さん今日はお休みかい。金「へい、今日は休みましてござります、就きまして差配
 さん少々お願があつて出ました。「ア、何だい。金「私共の隣家の源八と云ふ修
 業に出ます坊さんナ。「イヤあの坊さんに困つて居るのだよ、店請があつたんだけれ
 ど其店請が何所へ逃亡をしてつたので、今にもアノ坊さんに目を瞑られると係
 合だと思つて誠に案じて居るのサ。金「夫が貴方、段々詮索つて見ますると私と少
 し内縁の様に思はれます、仮令身寄でないにもせよ功德の為に葬式だけは私が引受
 けて出してやりたいと存じますが、夫に当人の遺言で是非火葬にして呉ると申すこ
 とで。「成程、夫は何うも御奇特な事で、お前が葬式を出して呉れ、ば誠に有難い
 ね、ぢやア何分お頼ウ申ますよ、今に私も行きますが、早桶や何かの手当は。金「ナ
 ニ宜しうございます、湯灌や何かもザツと致しまして、早桶と云つては高いものでは
 し何うせ焼いて了ふもんですから沢庵樽か菜漬樽にでも入れませう。「夫が宜からう、
 ソコでお前さんは施主の事だから袴でも着けるかい。金「十二夜分の事ではすから襦袢
 をひつくり返して穿きます。「デモ編笠は被らなければなるまい。金「ナニ三俵ポツ
 チでも被つて摺小木でも差して往きませう。「可笑しいな、狐にでも化されたやうで。金

「ナニ構やアしませぬ。「ぢやア何分頼むよ。金「へい宜しうがす。「お寺は何所だい。
 金「エ、麻布の三軒家なんで。「何うも大變に遠いね、まア宜い、ぢやア其積で。
 金「へい畏りました。是から宅へ歸つて支度をして居る中に長家の者も追々悔みに来る、
 差配人は葬式の施主が出来たので大きに喜び提灯を点けてやつて参り「金兵衛さん
 いろくお骨折、誠に御苦勞様。金「何ういたしまして、何うも遠方の処を恐入ま
 す、何れも稼業人ばかりですから成たけ早く致して了ひたいと存じます。「其方が宜
 い、机や何か立派に出来たね。金「ナニ板の古いのがありましたからチヨイと足を打附け
 て置いたので。「成程、早桶は大分宜いのがあつたね。金「ナニ是は沢庵樽で。
 「おや、山に十の字の焼印があるね、是は己ん所の沢庵樽ぢやアないか。金「何だか
 知れませぬが井戸端に水が盛つてあつたのを覆して持て来ましたが、ナニ直に明けてお返
 し申ます。「明けて返したつて仕やうがない、冗談云つちやアいけない、ぢやアそろ
 く出かけよう。是から長家の者が五六人付いて出かけましたが、お寺は貧窮山難波
 寺と云ふので、本堂には鴻雁寺が二挺点つて居る。金「皆さん嘸お疲勞でござい
 ませう、大きに有難う存じました。甲「何うも可哀さうな事をしましたな、私も長らく
 一緒に居つたが喰ふ物も喰はずに修業して歩き、金子を蓄た人ですから少しは貯金

がありましたらう。金「いえ何もありませんよ、何卒皆さん此方へお出なすつて十二本
 堂で苜を喫んだつて構やアしませぬ。其中に和尚が出て来る。和「ハイ何うも御愁
 傷な事で。金「何卒一ツ何とでも戒名をお附なすつて。此仏は是々で餅と金を
 一緒に食つて死んだのでげすから、とも申されませんが、戒名を見ると「安妄養空信
 士」と致して置かれたのには金兵衛が驚きました。金「成程、是は面白うがすな。
 和「夫では引導を渡して上げよう。グワン〜と鉦を打鳴し、和「南無喝囉怛那、哆
 羅夜耶、南無阿唎耶、婆盧羯諦爍鉢羅耶、菩提薩※婆耶。と神咒を唱へ往生集
 を朗読して後に引導を渡し、焼香も済んで了ふと。金「何うも皆さん遠方の処誠に有
 りがた難う存じました、本来ならば強飯かお酢でも上げなければならぬんですが、御承
 知の通りの貧乏葬式でげすから、恐入りましたが何も差上げませぬ、尤も外へ出
 ますと夜鷹蕎麦でも何でもありますから貴所方のお銭で御勝手に召上りまして。甲
 「何だ人面白くもねえ、先へ出よう〜。金兵衛どんお前是から焼場へ持つて行くの
 に独ぢやア困るだらうから己が片棒担いでやらうか。金「十二宜しうがす、私が独で脊
 負て行きます、成たけ入費の係らぬ方が宜しうがすから。金「宜いかえ。金「エ、宜うがす
 とも。と早桶を脊負ひ焼場鑑札を貰つてドン〜焼場へ来まして。金「お頼う申しま

す。坊「ドーレ。金「何卒これを。坊「ア、成程、難渋寺かへ、宜しい、此方へ。金「それで此並焼はお幾らでげす。坊「並焼は一步と二百だね。金「へ、何うでげせう、三朱位には負りますまいか。坊「焼場へ来て値切るものもないもんだ、極つて居るよ。金「ナ二本当に焼けないでも宜しいんで。坊「然うはいかない、一体に火が掛るんだから。金「頭と足の方はホンガリ焼いて腹は生焼にはなりますまいか。坊「然うはいきませぬよ、元臍だから一体に火が掛るでな。金「ぢやア明朝早く骨揚に来ますから、死骸を間違ひないやうに願ひます。坊「其様な事はありません。金「何分お頼み申します。と宅へ歸つたがまだ暗い中にやつて来ました。金「お早う。坊「えらう早く来たな、まだ薄暗いの。金「エへ、昨晚は大にお喧ましようございます。坊「ウム値切た人か、サ此方へ這入んなさい。金「へい、有難う。坊「穩坊く、見て上げる。穩「はい此方へお出なさい、骨を入れる物を持ってお出なすつたか。金「イエ、何か買はうと思つたが大分高えやうですから、彼所に二升壘の口の欠たのがあつたから彼を持って来ました。穩「彼は私が水を入れて置いたのだ、無闇に口なんぞを打欠いちやアいけませんよ。金「エへ、御免なさい、兎に角頂戴しませう、一体に黒くなりやしたな、何うも、南無阿弥陀仏々々《々々《々々《々々《々々《、成程此木の箸と竹の箸で斯うする

んですな、お前まいさん彼方あつちへ行いつて、お呉くんなさい。穩わし「私わしが見みて居ゐねえでは齒骨はっこつや何かなに分わかるまい。金「ナニ知ちつてるよ、ちやんと心得こころえてるんだ、彼方あつちへ行いけ、行いかねえと撲なぐり附つけるぞ、行いかねえか畜生ちくしやう。箸はしで段々だん／＼灰はいを搔かいて行いくと腹はらの辺あたりかたまり木きと竹たけの箸はしでヅンと突割つきわると中なかから色いろも変かはらず山吹色やまぶきいろの古金こきんが出るから、慌あはて、両りやう方の袂たもとへ入れながら。金「穩坊をんぼうの畜生ちくしやう、此方こつちへ這入はいて来きやアがると肯きかねえぞ、無む闇やみに這入はいりやアがるとオンボウ焼やいて押付おつけるぞ。と悪体あくたいをつきながら穩坊をんぼうの袖そでの下したを搔か潜かくつてスーツと駈出かけだして行いきました。穩「アレ、乱暴らんぼう狼藉らうぜきな奴やつもあればあるものだ、アレ逃にげてツちまつた。金兵衛きんべゑさんは此金このかね子を以もつて、芝金杉橋しばかなすぎばしの本もとへ、黄金餅こがねもちと云いふ餅屋もちやを出いしたのが、大層たいそう繁はんじやう昌やういたした。と云いふ一席せきばなし話わでござります。

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黄金餅

三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>